

心豊かで主体的に活動する生徒の育成 ～個の力を向上させるためのQUアンケートの活用～

I 研究の内容

1. 主題設定の理由

平成15年中央教育審議会答申により「生きる力」をはぐくむという新学習指導要領の基本的なねらいの重要性を確認し、「生きる力」を心の側面からとらえた「確かな学力」の育成に係る具体的な方策が提言された。そして「生きる力」の育成を重視した新学習指導要領が平成24年度から全面実施となった。新学習指導要領で示された、「確かな学力」をすべての生徒に身につけさせることが求められている。ここで示された「確かな学力」とは知識や技能はもちろんのこと、これに加えて学ぶ意欲や自分で課題を見付け、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題解決する資質や能力等まで含めたものをいう。

本校では、過去4年間にわたり「心豊かで主体的に活動する生徒の育成～表現力の育成を図るための言語活動の工夫を通して～」という研究主題のもと、研究を進めてきた。知的活動（論理や思考）の基盤、コミュニケーションや感性・情緒の基盤となる言語力に課題が有るという現状認識から、自分の考えや思いを多くの場面で、より適切な言葉で正しく相手に表現することができるようになれば、確かな知性と心豊かな人間性をもち、より主体的に活動する生徒の育成につながるとの仮説から様々な表現力の工夫を教育活動に取り入れ成果を得てきた。このようななか、集団としての成果が上がる一方で、新たな課題として「個の力」の向上があげられた。

「個の力」とは、人前でも自分の考えをしっかりと発言できたり（表現力）、集団で出来る大きな挨拶などが個となったときにもしっかりと出来る個々の能力と考えている。そして、個の力を向上させるには、所属する学級集団が親和的であることが必要であり、大きなポイントと考えた。そこで、QUアンケートを使い学級集団の状態を把握するなかで、生徒一人一人が、個の力を伸ばせるように手立てを考え実行していく。個の力を向上させていくことで、学級集団が「支え合い、学び合い、教育力のある、質の高い集団」となると仮定し本主題を設定した。

2. 研究の具体的内容と方法

(1) 個の力を向上させるための言語活動やQUアンケートの活用

- ・QUアンケートを活用しK13法を取り入れた、個々への支援法の研究と実践
- ・個の力を高めるため、教科指導における具体的な手段をさぐり、全職員が共通理解し実践する。
- ・家庭学習の工夫をさせる。考えさせながら家庭学習の習慣づけを目的とする。
- ・研究授業を通して、実践検証する。（数学・英語）

(2) 日常的に個の力を高める研究（塩北ライフの実践）

- ・挨拶，授業規律，生活規律の徹底
- ・部活動や集会等における挨拶の仕方，返事の徹底
- ・その場に応じた適切な言葉遣いの使用
- ・日々の表現活動（スピーチ，掃除の反省会，生活記録ノート）

（3）学力向上に関する研究と実践

- ・ティームティーチングの実践（数学・英語）
- ・基礎基本及び家庭学習習慣の定着をはかる，ランクアップテストの実施
- ・夏期学習会、読書活動の推進
- ・NRTの実施と活用

II 成果と課題

1. 成果

成果として、昨年度までは学級集団の状態把握することを主として活用していた QU アンケートであるが、今年度はさらに研究を進めた点が挙げられる。学級把握から学級アセスメントを行い把握した集団類型に対してどのような方策をとればよりよい集団になるのか、K-13 法を取り入れて職員全体で話し合った。さらに、NRT とのクロス集計を行うことで、生徒一人一人の状態をつかむことができた。1 年 1 学級，2 年 2 学級，3 年 1 学級の計 4 学級であるが，第 1 回目の QU アンケートの結果を受け，分析及び対応策を検討した。その結果，明確にどのようにしていくか方針を立てることで，迷いなく働きかけができた。ソーシャルスキルトレーニングやエンカウンターを行うことで，緩みの見られる状態から親和的な状態へと学級集団を変容させることができた。さらに，要支援群の生徒へ意図的に働きかけることで，自己肯定感や有用感が高まり，要支援群生徒の割合を減少させることができた。

今まで取り組んできた研究を継続しつつ，さらに実践力を高めることができるようになってきた。

2. 課題

堅さの見られる状態の学級へエンカウンターを取り入れ，リレーションづくりを行ってきたが，2 回目の QU では緩みの見られる状態になってしまうことがあった。今年度から始めた研究であり，まだまだその対応策が的確でなかったり，アセスメントが的確でないことも考えられ，来年度以降も研究を進め，対応策の幅を広げていくことが必要である。また，個への働きかけと集団への働きかけのバランスを考えると，集団への重心が多くなってしまい，個への働きかけをもっとすべきであった。来年度以降への課題である。

継続して行っている取り組みの中で，自主学習などでの家庭学習の習慣化が定着したが，まだ，十分な成果が上がっておらず停滞感があるため，さらなる工夫をし続けることが必要だと考えられる。個の力を向上させるためにも，このことは必要である。

III 成果物

- | | | |
|--------------|-----|---------------------------------|
| 1 年「数学」学習指導案 | 単元名 | 「方程式」 |
| 2 年「英語」学習指導案 | 単元名 | 「Unit 5 A New Language Service」 |

（研究主任 佐久間 寛）